

AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学 図書館報

vol. **62**

2026年1月31日

【編集・発行】

神戸市外国語大学

図書館



AD ALTIORA SEMPER（アド・アルティオラ・センベル）とは

ラテン語で「常により高きを求めて」という意味です



巻頭言

大学図書館への恩義 P.1

P.2 文中作品紹介

P.3 著書紹介

P.4 展示「GS文庫」

ほか

大学図書館への恩義

西川 健誠

外国語は好き、でも外国文学に傾倒できるかな？という状態のまま外国文学教師になった。根っから文学好きの先生方と比べ、私の図書、さらには図書館との接し方の「筋金入り」度は間違いなく劣る。それでもそこそこ respectable な（と信じたい）外国文学者としての自分があるとすれば、それは大学図書館のおかげだ。感謝の念を示すべく、またかつての私同様、外国語は好きだけど専門研究者になるか迷っている学生さんへ何がしかヒントとなるよう、私の大学図書館とのおつきあいを記したい。

80年代後半・90年代初頭は学部生・修士課程大学院生時代を東京大学駒場キャンパスで過ごした。修論よりも卒論で図書館のお世話になった記憶が強い。取り上げたのは Alfred Tennyson, *In Memoriam*。原文をわかろうとすれば当時は（現時点でも、だろうか）A.C.Bradley, *A Commentary on Tennyson's "In Memoriam"* (1901) を参照するのが必須であったⁱ。私が読んだのは旧制一高時代に購入された1920年版で、同書は教養学部全体の図書館の書庫所蔵であった。だが私以前誰にも読まれなかったのか、フランス装の頁をペーパーナイフで切って読み進めた。ヴィクトリア朝の作品だから、ぴったりの語義を見つけたければ OED よりも UED (H. C. Wyld [ed.], *Universal English Dictionary* [1932]) を引くのがよいかもⁱⁱ、と指導の先生に勧められたのも同じ頃である。この辞書をなると「独占使用」するべく、4年次の夏休みは、上記の図書館とは別にある教養学科図書室の北側窓下の机を定位置としてキープしようとしたものだ。

90年代前半は奨学金をいただき、米国アーモスト大学 (Amherst College) に留学した。同大学ゆかりの詩人 Robert Frost の名を冠した図書館は、丘陵地を利用した地上三階・地下三階の建物であった。それだけでも驚いたが、冷戦終結で不要になった、

谷向こうの山の地下核シェルターを書庫用に購入する、という話が出ていたのにはさらに驚いた。二度目の卒論は John Milton, *Paradise Lost*ⁱⁱⁱ。となれば OED のお世話にならざるを得ず、学内 LAN 経由で寮の自室から図書館契約の OED online へ接続可能になる前だったから、再び、独占使用をねらうべく館内の定位置をキープした（日本から研究社大英和も持参していたが、寮の部屋からそこまで毎度持ち運ぶわけにもいかず、「定位置」は同辞典のそばでもあらねばならなかった^{iv}）。歴史学の授業で John Foxe, *Book of Martyrs* についてレポートを課され、Rare Book Section にある（初版ではないが）古い版を参照するよう求められたことも記憶している。神戸外大奉職後、指昭博先生（前学長、名誉教授）が同書につき詳しい論文を書いておられることを知り、またリプリントではあるが本学図書館で同書に再会した時には^v、懐かしく思った。

現在ではあり得ぬ僥倖であるが、留学から帰国後すぐに大学での仕事を得た。千葉県流山市の東洋学園大学は開学3年目の新設大学で、図書館は大規模とはいえなかったが、購読の海外の新聞・雑誌の豊富さには目を見張った。日本帰国後なるべく英語圏の雰囲気に関わりたく、本当はもっと専門書を読み研究に勤しむべきだったかもしれぬが、図書館でゆったり英米の新聞・雑誌を読んだものだった。好んで読んだのは、留学先の先生がたびたび批評を寄稿していた *Hudson Review*。キャンパスを都心に統合しても同大学が購読を続けていれば、と願う。翻って本学を鑑みるに、長期的な経費削減に不利な為替レートが加わって、海外の新聞・雑誌の購読数は減る一方だ。専攻語圏内の有力新聞・雑誌でも購読中止になったものが案外ある。懐具合が寂しいのは承知しているが、本学に求められている外国学・地域研究のセンターとしての役割を考え、要路の方々に

は再考をお願いしたい。

神戸外大に着任してからもう 20 年以上になる。その間どれ程お世話になってきたか、当然書き尽くせないが、コロナ下の本学図書館の対応にはやはりあらためて、そして文字に残る形で、謝意を示したい。当時、研究必携へのチャプター執筆を二つ・事典のやや長めの項目執筆を二つ、抱えていた。どれも概論的要素を求められる関係で、自宅・個人研究室に手持ちの資料だけでは到底書けなかった。普段より長く借り出し可能としたこと、郵送での借り出し・返却を認めて下さったこと、そしてそもそもな

るだけ（借りに行くためだけでも）入館できるようにしていただくことは、ひょっとしたら他大学でも可能であったのかもしれないにせよ、小生にとっては極めて有難かった。とにもかくにも研究者として求められていた仕事を当初の締め切りを守ってこなせたのは、ひとえに非常時に最大限平時に近い形で業務を行って下さった、本学の図書館のおかげと言ってよい。

定年までの時間は思いのほか早く過ぎよう。その時まで多少なりともこれまでの恩義に応えるだけの知的 output が出来ればと思っている。

ⁱ 神戸外大でも所蔵。(書庫 2 階 931=BA=1)。こちらは私の前に読んだ方がいた。詩の原文と日本語での詳細な注釈は、研究社英文学叢書の中に入っている 1922 年出版の、斎藤勇 *In Memoriam* (書庫 2 階、9308=EIB=3-82) にお世話になった(より正確に言えば、私が用いたのは同書の改訂・新装版 [1974] だが)。

ⁱⁱ 神戸外大では三冊所蔵。二冊は 1936 年に日本の丸善から出された新版。このうちの一冊は書庫 2 階 (833=1)、もう一冊は小西文庫 (小西 C=96)。もう一冊は Eric Partridge の序文がついた 1961 年の版で、こちらは閲覧室の英語の辞書の棚 (N833.1=R=35)。

ⁱⁱⁱ プロとして *PL* を読むのであれば、Alastair Fowler と John Carey 編注の *The Poems of John Milton* (Longmans, 1968) (本学閲覧室書架 N931.5=12) を使ってほしい。

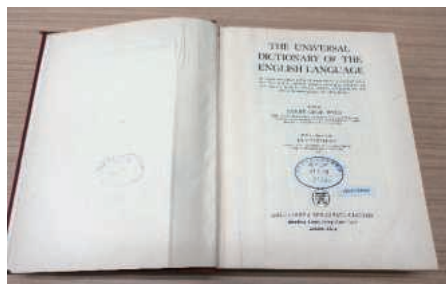
^{iv} もっとも東京大学では常時研究社大英和をリュックに背負っている同級生がいた。それなりに英語の勉強には熱心なつもりで自分であつたけれど、上には上がいる、と思った。きっと同じ時期の神戸外大にも、そういう学生さんがいたに違いない。

^v George Townsend (ed.), *The Acts and Monuments of John Foxe: with a life of the martyrologist, and vindication of the work* (8 volumes. AMS Press, 1965) 外大では書庫にあって、請求記号は N198.3=56=1-8。

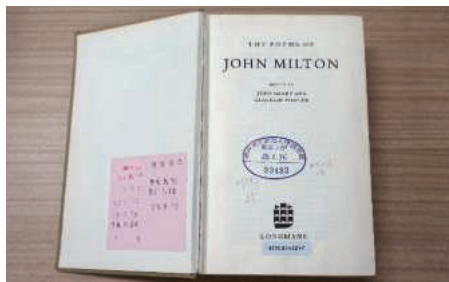
■ 文中紹介作品(図書館所蔵)



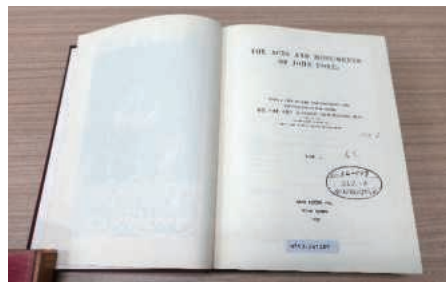
A. C. Bradley. *A Commentary on Tennyson's In Memoriam*. (Macmillan, 1920) 当館所蔵資料



Henry Cecil Wyld. *The Universal Dictionary of the English Language*. With an appendix by Eric Partridge. (Routledge & Kegan Paul, 1961) 当館所蔵資料



John Carey and Alastair Fowler (ed.). *The Poems of John Milton*. (Longmans, 1968). 当館所蔵資料



George Townsend (ed.). *The Acts and Monuments of John Foxe: with a life of the martyrologist, and vindication of the work*. vol.1. (AMS Press, 1965). 当館所蔵資料



教育の言葉に躊躇う

総合文化グループ准教授

安喰 勇平 (あんじき ゆうへい)

相手のことを想い、考えるために、自分自身の前提や考え方に偏りや誤りがないかどうかを点検することは大切だ。自分が生まれ育った環境において「普通」「当たり前」だったことが、相手にとっては「普通」「当たり前」ではないかもしれない。だからこそ、自分自身のなかにある「普通」や「当たり前」を点検し、解きほぐし、相手の考え方や気持ちを想像することが大切である。このように自分自身に対して、反省的に、批判的に向き合うことが、他者理解のために倫理的に求められると言ってもよいだろう。

このような考え方は間違いなく大事だ。しかし、これらが大事だと言われることに対して二の足を踏みたくなる。「自分が自分を点検する」という構図において、点検者である自分は、どれだけフェアに、どれだけ適切に、自分を点検できるだろうか？自分の都合のよいように点検をしたことにしてしまうのではないか？「自分は自分を点検したうえであなたのことをちゃんと考えることができますよ」という一回ひねりの自己優越に浸った点検者が出てこないだろうか？批判的思考、メタ認知、省察、反省等々。これらが大切であることは分かる。しかし、それらは何の留保もなく大切であるわけではないだろう。自己点検の必要性は、多少の躊躇とともに語られるべきであるように思う。そのように言わねばならない程、自己点検という営みは、細い尾根を渡り切るように険しく困難な営みである。

教育を語る言葉においても事情は同様である。子どもの成長に関していえば、「自己を見つめ直す」という表現が道德教育やキャリア教育の場面でよく見られるのに加え、教師の成長の契機としても自己反省の重要性が強調されている。教育の言説においても、自分自身の考え方に備わる「普通」や「当たり前」

『レヴィナスと教育学：他者をめぐる教育学の語りを問い直す』

安喰勇平 著

春風社, 2022年2月発行

図書館所蔵: N371==142



『わたしの学術書2：博士論文書籍化をめぐって』

春風社編集部 編

春風社, 2025年10月発行

図書館所蔵: N002==172



『『存在の彼方へ』を解読する：レヴィナス研究の現在』

佐藤香織, 馬場智一 編

法政大学出版局,

2025年12月発行

図書館所蔵: N135.5==285



を点検し、問い直すことがポジティブに語られてきた。この動向に横槍を入れようとしたのが『レヴィナスと教育学』だった。レヴィナスは自己よりも他者、能動性よりも受動性、強さよりも弱さに重きを置いた哲学を提示した人物である。だからこそ、レヴィナスは、自己反省について論じる時も、自ら自分を反省することを批判し、他者によって反省を迫られる受動的で弱いありようを重視する。このレヴィナスの見立ては、自己点検を褒めそやす動向を批判するための見通しのよい視座を与えてくれる。

自己点検、自己反省における自己の閉塞性に対する違和感と、他者へと開かれたあり方に対する希望を、教育学研究としていかに形にできるかを模索したのが『レヴィナスと教育学』である。この本をめぐる悲喜こもごもを綴ったエッセイ(『わたしの学術書2』収録)と、『レヴィナスと教育学』後の方向性を模索した論考(『『存在の彼方へ』を解読する』収録)を書く機会にも昨年中に恵まれた。他者との関係のなかで自己が変わるということについて、一緒にじっくり考えてみてほしいかなという方に手に取ってもらえると嬉しい。

展示「GS文庫」

2025年8月、神戸市外国語大学の在校生と外務省に勤める本学卒業生有志が多面的・多角的につながるプロジェクト「Gaidai Spirits: From KCUFS to MOFA」の一環として、『GS(Gaidai Spirits)文庫』を設置しました。

- ・外交：多文明時代の対話と交渉 / 細谷雄一著
- ・誰も知らないロシア：若手外交官が見た隣国の素顔 / 石川知仁著
- ・陸奥宗光：「日本外交の祖」の生涯 / 佐々木雄一著
- ・国連で働く：世界を支える仕事 / 植木安弘編著

といった、外務省や国際機関でのキャリアに関連した資料を展示しています。

また、外務省卒業生が推薦した図書にはPOPを付けると共に、蔵書検索システムで「外大外務省Alumni」名による書評として公開しています。なんとなく遠く感じる外務省かも知れませんが、まずは1冊の本から身近に感じていただければと思います。



研修参加報告

漢籍担当職員講習会（初級・中級）

＜京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター主催＞

初級、中級それぞれ5日間、漢籍の取り扱いに関する知識と技術の普及を目的とし、実習と講義を交えた講習会に職員1名が参加しました。実習では同センター所蔵の漢籍の目録を作成しました。

漢籍整理長期研修

＜東京大学東洋文化研究所主催＞

6月と9月に計10日間、講義と所属機関での課題実習という構成で、漢籍の取扱いや整理に関する技術の習得を目指す研修に職員1名が参加しました。課題実習では1982年に本学を退職された太田辰夫先生の旧蔵書から『洪武正韻』を紹介しました。



図書館日誌

《2025年7月～2025年12月》

2025年 7.20/27	試験期日曜開館
8.4-15	高校生・受験生体験企画「夏休みに外大図書館へ来てみませんか？」開催
8.8	GS(Gaidai Spirit)文庫の設置
8.21-29	蔵書点検
9.16	JLPオリエンテーション
9.22-10.24	SDGs月間特別テーマ展示を実施
10.1-23	図書館利用ガイダンス対面実施
10.21-22	トライやるウィーク（1校2名受入）
11.20/12.3	ラーニングアドバイザートークイベント開催

AD ALTIORA SEMPER vol.62
神戸市外国語大学図書館報 第62号

ISSN	0919-2336
編集・発行	神戸市外国語大学図書館
	〒651-2187 神戸市西区学園東町9丁目1
	TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257
	URL：https://www.kobe-cufs.ac.jp/library/
発行日	2026年1月31日
発行責任者	図書館長 竹越 孝